

大地揺るがす津軽の大太鼓 CF活用し出陣

本州最北の城下町の夏の夜を彩る弘前ねぶたまつり。闇に浮かぶ鮮やかな武者絵行列では「津軽剛情張（ごうじょっぱり）大太鼓」の勇壮な響きも呼び物の一つだ。少子高齢化で祭りの担い手不足が深刻化する中、弘前青年会議所は2019年、クラウドファンディング（CF）を活用して半纏を新調し、伝統の祭りを次代に伝える挑戦を始めた。

「じょっぱり」は、津軽弁で意地っ張り、負けず嫌いを指す言葉。津軽の大太鼓をめぐっては、弘前藩のお殿様が江戸城中のお国自慢で「国元には十尺に余る太鼓がある」と口を滑らせ、実物を作るはめになった一とも伝えられる。大太鼓は、そんな逸話に沿った祭りのシンボルとして、弘前市制施行100周年の1989（平成元）年に誕生した。

直径4mもある太鼓から打ち出される音は「グワン、グワン」と迫力たっぷり。囃子方の男女が勇ましくバチを振るう様子は、沿道の祭り客から盛んな喝采を浴びてきた。ただ、運行には引き手だけで約50人、さらに囃子や統制係など多くのスタッフを要する。人手不足が年々深刻化するにつれ、太鼓が祭り行列に加わらず展示だけで終わる年が増えていた。

そこで、運行を取り仕切る弘前青年会議所は、観光客や若者にアピールできるような半纏に新調することを決めた。資金集めの方法として東奥日報社のCFサイト「HANASAKA（ハナサカ）」を選び、地元住民の関心を高めるためデザインを公募した。その思いを、秋元駿一理事長は「太鼓を運行させるだけでなく、若い人たちと一緒に伝統を紡いでいくことが大きな目的なんです」と話す。

CFで集まった支援金は70万円余り。昨年8月の弘前ねぶたにはそろいの半纏に身を包んだ新顔の引き手も加わり、祭り客から大きな声援が送られた。半纏で目を引くのが、城下町らしさを強調した市内小学生による図柄と地色のピンク。それは、日本一の桜の名所・弘前城に寄せる地元愛の証しでもある。

東奥日報社 広告局企画制作部長 畠山温光



極彩色の扇型の武者絵が夏の夜空を染める「弘前ねぶたまつり」



新調した半纏に身を包んだ運行スタッフ（写真左）と共に練り歩く津軽剛情張大太鼓